

遠別町

望月理早

1. 地名の由来

開拓者の出身地の殿様(加賀前田藩)の名前をとったものである。アイヌ語の「ソーラップ」が語源である。

2. 歴史

明治 29 年、遠別原野等が植民地に選定され翌 30 年の春から入植者の足音が響くようになり、越前団体、愛知団体、尾張団体、秋田、千葉から入植者が遠別原野に広がって行った。入植当時の遠別は、北海道の他の多くの植民地と同じく、見渡す限りの原始林が空を覆い、地面を笹や草が埋め尽くしていたのである。入植者の最初の仕事は木を伐採し土地を切り開くことである。密林の開墾は困難をきわめた。大きなマサカリで傷をつけて枯らせたり、大木の根元に木を寄せ掛けて火の力で燃え切らせて倒したりするなど、時間のかかる作業である。またヒグマや害虫などにも悩まされる日々が続いた。伐採が終わると今度は土地の開墾、そして耕作と進んでいった。木を切り、笹を刈るとすぐ鋤って畝を作り、南瓜、馬鈴薯、小豆、粟など少しずつ蒔いた。しかし、播種期の遅れと秋霜とが重なり、入植当初は十分な生育を見なかった。唯一収穫に結びついたのは馬鈴薯で、これは入植者の大切な主食となったのである。

開基以後、遠別の農業は麦や豆といった畑作が中心になった。寒冷な気候という条件に加えて、明治政府や開拓使なども「気候条件の近いヨーロッパ・北アメリカにその範を求めた畑作」を奨励していたからである。しかしほとんどが本州からの入植者たちは、開拓地で畑作に打ち込みながらも「この土地でなんとか米を作ってみたい」という夢をすてなかったのだ。入植後すぐに水稻栽培を試みた者もいたが、なかなか成功には結びつかなかったようである。

明治 34 年、本原野 24 号において南山任太郎が先ず福井県産の種子による苗植法で試作、これは芳しくなかったものの、2 年後には上川産の種子で根付けをし、かなりの収穫を得た。これが遠別での稲作の発祥となったのである。「稲作北限のまち」の歩みは、ここから始まったのである。彼に倣って各地域で水田熱が起こり、更に土功組合の設立(大正 10 年)で灌漑溝の竣工などで急速に水稻栽培が本格化したのである。

図1 地図



4 . 地理・気候（緯度・経度・年間の気温の推移など）

表1 緯度・経度

		遠別町
役場の位置	(北緯)	44度43分12秒
	(東経)	141度47分46秒
東端	(東経)	142度07分11秒

西 端	(東 経)	141 度 46 分 01 秒
南 端	(北 緯)	44 度 21 分 09 秒
北 端	(北 緯)	44 度 50 分 35 秒

「平成 12 年度版 日本の市区町村位置情報要覧」(建設省国土地理院)

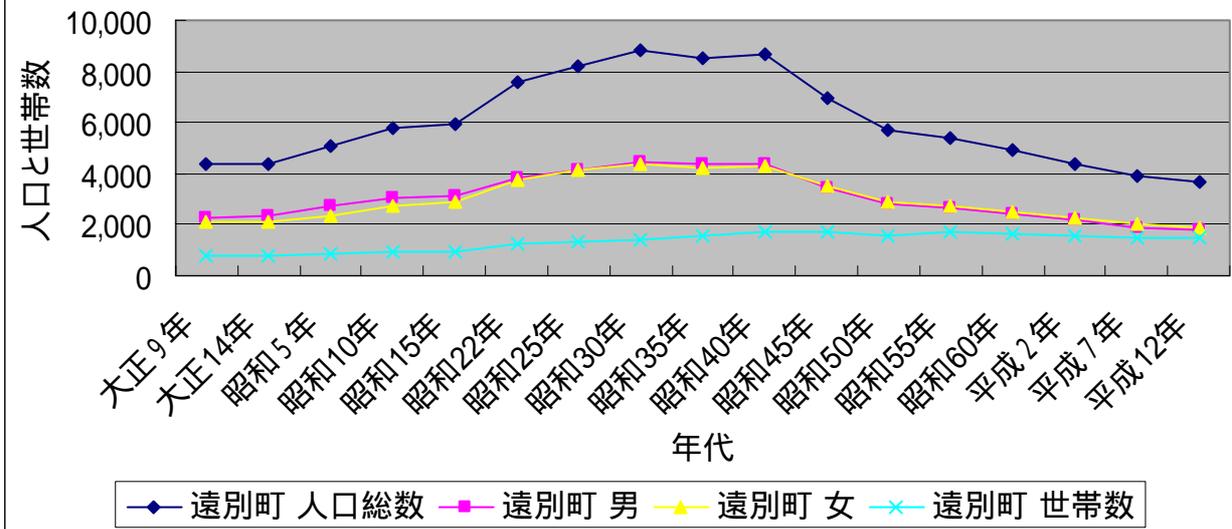
表 2 年間気温

	平均気温						
	-5.6	最高気 温(極)	最低気 温(極)	降水量	日照時 間	平均風 速	最大風 速
1 月	-6.4	4	-17.9	92	34.7	4.6	16
2 月	-3.4	5.3	-22.3	61	80.2	4.6	16
3 月	3.8	8.3	-16.8	78	93.5	4.1	14
4 月	9.6	19.8	-10.4	60	173.9	3.2	9
5 月	15.7	21.1	-0.5	122	135.9	3.4	13
6 月	19.8	26.8	5.6	33	150.9	2.6	6
7 月	22.2	31.3	10.1	234	98.9	2.5	7
8 月	17.7	30.7	13.1	194	181.4	2.5	8
9 月	10.2	28.2	2.7	151	168.6	3.3	12
10 月	3.7	19.3	-0.4	234	100	4.5	14
11 月	-3.1	12.6	-7.7	118	43	5.1	17
12 月	7	6.8	-14.7	118	28.4	4.5	12
年平均 等	度	31.3	-22.3	1,495	1289.4	3.7	17
単位	度		度	mm	h	m 毎秒	m 毎秒

最北の地で水稲営農が継続できる要因として、日本海を流れる、対馬暖流の影響により、農耕期間の積算気温、は 2,500 から 2,900 と温暖な気候である。

又、水田の水源である遠別川の水源はピッシリ岳であり位置的には羽幌町と同じくらい南部となり、水温の高さが幸いしてゐるのである。世界的に見ると、遠別町より北部の地域で稲作が行われているが、その殆どが自生種であったり、陸稲であるとのことであり、水稲としては世界的に最北であろうと考えられた。

図2 遠別町の人口と世帯数について



このグラフから遠別町の人口総数は大正9年から昭和35年まで増えていっているが、昭和45年くらいから減ってきている事が分かった。平成12年には人口4000人をきってしまった。また男と女の人口は同じくらいだ。人口も同じ位ずつ減ってきた。それらに比べ、世帯数は年々、少しずつ増えてきていることがわかった。

6 産業

遠別町は、実り豊かな大地や日本海を舞台にした農業、林業、水産業と市街地の国道と町道（通称：昭和通り）をメインとした、古き良き時代の面影を残しながら、現代的感覚を追う商工業が主な産業である。

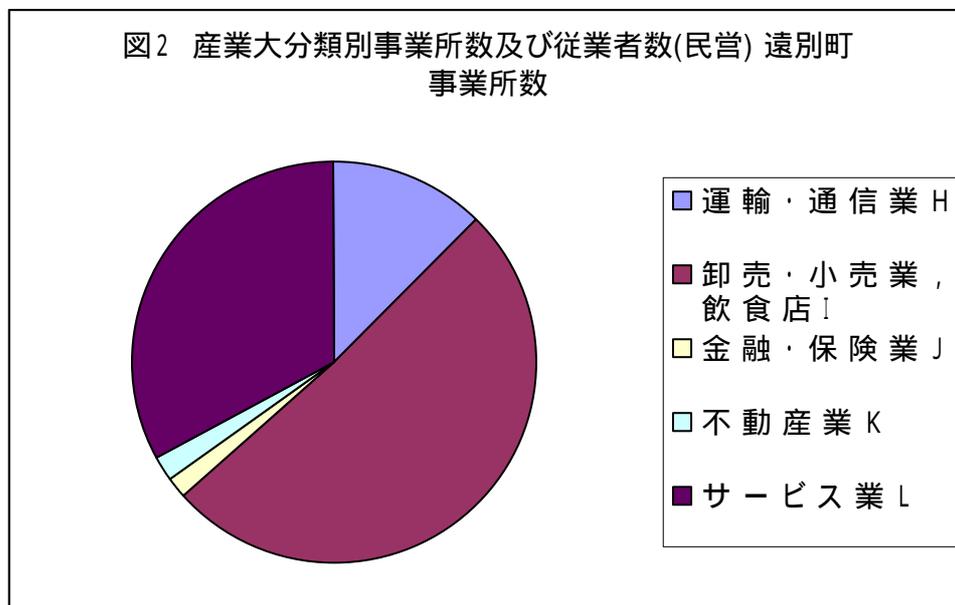
町を流れる遠別川が作り出す、実り豊かな大地と低農薬で行われる農業は稲作が中心で、日本最北の米どころとして、良質なもち米が生産されるほか、味がよいと評判のメロン、ホウレンソウ、アスパラガスなどの野菜も生産しているのだ。

また、牛が広い大地でゆったりと牧草を食み、良質な牛乳を生み出す酪農、町の面積の88%を占める森林を生かす林業も盛んである。

ふところ豊かで、おいしい、身の締まった魚介類が獲れる日本海が舞台の漁業は、従来の獲る漁業にとらわれず、ほたての稚貝を養殖し生産地へ出荷したり、煮だこなど、近海で獲れた魚介類に付加価値をつけ生産・販売するなど、さまざまな取り組みをしているのである。

遠別の商工業は、人のぬくもりと現代的な感覚を大切にしながら、活気ある経営を展開すべく、地酒「北吹雪」を始めとする地場製品の販売、商店街をより良くするためにた

ゆまぬ努力をしているのだ。



産業大分類別事業所数及び従業者数(民营)(H11.7.1)

このグラフから卸売り、小売業、飲食店とサービス業がこの遠別町では盛んであるということが分かった。運輸・通信業で働いている人も多くはありませんが金融 保険業や不動産業で働いている人の数に比べると結構いた。その一方、金融・保険業と不動産業で働いている人は少なすぎである。この町ではお金になりそうな金融・保険業や不動産業などで働いている人が少ないので、そういう仕事をする人が増えればもっと経済発達に向かうと考えた

。

8 . 農業

本町農業は、豊かな水資源と自然環境に恵まれ、稲作や畜産を中心に畑作、野菜等幅広く農畜産物を生産しているのである。

日本海沿いの地域は、米の生産調整により、畜産や畑作に経営転換され、規模の大きい経営を展開しているのである。

牛乳生産は、第1次・第2次農構や生産基盤の整備によって規模の拡大を図り、牛肉の自由化や生乳の生産調整に対応しながら生産の拡大をはかっているのである。

他方、遠別川流域の水田地帯を中心に、うるち米からもち米への転換を図り、複合作物として野菜を導入し、生産性の向上や農業所得の確保に努めているのである。

9 . 主な観光名所・スポット

富士見ヶ丘公園、金浦原生花園、旭温泉、みなくるビーチ、遠別川河川公園など数多く点在しており、またイベントでは北北海道パークゴルフ大会、エンベツふれあいマラソン大会、えんべつ冬まつり、遠別どっさりまつりなどである。

< 金浦原生花園 >

イソツツジ、ヒオウギアヤメなどが咲き、6~7月にかけてエゾカジソウの花が一斉に咲き、黄色いジュータンのようになるのだ。利尻富士とのコントラストも、みごとである。

< 旭温泉 >

道の駅富士見の 8.6 キロ南から町場を 6 キロほど山に入り、行き止まりが旭温泉。薬効抜群の秘湯で宿泊はもちろん日帰りも良いのである。

「北海道 北の街道 HP : http://www.do-shokoren.com/kaido/jp_n/enbetsu.htm」

「遠別町 HP」

<http://www.town.embetsu.hokkaido.jp>

「遠別町みどころ HP」

http://www.hosyu.gr.jp/midokoro/spot_enbe.htm

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%81%A0%E5%88%A5%E7%94%BA>